

鴻 koh

月刊俳句誌

令和3年11月1日発行

(毎月1回1日発行)

第16巻第11号 通巻185号

11 月号

2021



かなかなが木立の奥の奥の奥

鶏頭を数へ直して獺祭忌

花木権吉田鴻司の墓訪はな

いちにちを気儘に雨の里の秋

二百十日の雨と競へる草の丈

きちきちばつた跳んで鬼城の忌の夕べ

傘畳みしばらく鮎の築にゐる

とうすみ蜻蛉水の影とも光とも

迢空の忌なり野の色山の色

蘆原の日向ばかりを歩きけり

あららぎは実に燦々と日の雫

十五夜の地蔵一体ごとの黙

一筆啓上葉月の雨となりにけり

一筆啓上

主宰作品

増成栗人

詩 作品抄

周五郎の地の風鈴の江戸切子

田邑利宏

かなかなや終着駅の木のベンチ

神野未友紀

痒くなるほどみんなの鳴く一樹

守屋吉郎

トーストを三角に切る今朝の秋

山田ゆきこ

龍之介の忌なりつつつと青蜥蜴

山岸明子

苦瓜を煮て可も不可もなき暮らし

伊藤真代

鳳仙花本家分家は一と屋敷

駒井ちえ子

気促なる風がときをり門火焚く

石垣真理子

巴里祭の Pasta にバジル効かせゐる

竹山一子

蝸や何ぞ急かされゐる如し

山口民子

水鉄砲放てば虹の生まれけり

中川幸恵

敗戦忌海は静かに暮れゆけり

後藤久美子

しらじらと明けて短き蝦夷の夏

北原沙織

不機嫌に湯を沸かしをり終戦日

森 祐司

夜の蟬ひと声鳴きてそれつきり

守屋久江

毬栗の棘まだやはし夕爾の忌

山内宏子

涼新たやはらかく蚊に刺されけり

西條弘子

真直ぐに伸びて節ある木賊刈る

原 光生

恙なきひとときのあり小判草

井上つぐみ

踏切を越えてひとつばたごの花

遠藤 泉

増成栗人 選

横井 遥

棘増やしつつ仙人掌の膨らみぬ
 ばふばふとインドの楽器秋闌くる
 押し花のごと蠮螋の死のありぬ
 並び打つ柏手天の高くなる
 花嫁と鳥居をくぐる秋日和
 綿帽子笑む唇を見せて秋
 花嫁の歩幅に合はせ涼新た
 会席膳甘味に有りの実の蜜煮

花をつけ家を囲める茶の垣根
 アボカドにぐるり刃を入れ厄日かな
 タピオカの太きストロー街残暑
 隠れ咲き隠れ枯れをり思ひ草
 星草の密にかたまり咲けばこそ
 長き縁やおでん屋の酒と友



二〇二〇年一月二十九日～二月五日までイタリアへの旅行が叶ったが、帰ってきたらコロナウイルスが広がりはじめていた。振り返れば良く行けたなと思う。暫く海外への旅は無理だとしても、せめて友達と楽しいお酒が飲みたいなど。

啓泉さん第一句集『舟唄』の上梓おめでとうございます。
平成十九年四月「鴻」に入会后、啓泉さんとはお会いする機会に恵まれず、長年誌上を通して存じ上げておりました。

この度の句集により長きに渡り俳句の研鑽を積み、現在迄地域の方々と共に文化の交流に務め、「胡桃」同人会長として活躍されているご様子を知ることが出来ました。

宮城県在住の私は朝日町へ林檎狩に訪れていました。途中名物の蕎麦を堪能。青空の下真つ赤な林檎を挽ぎ、楽しいひと時を過ごしました。帰りは大江町の温泉で汗を流すのが恒例でした。目の前に最上川が流れ、ドラマ「おしん」の真冬の川を下るシーンに思いを馳せしばし佇んでいました。現在は双方の高齢化により途絶えましたが、大江町はとても懐かしい思い出の地です。この度句集の鑑賞にあたり、これもご縁かなと思っております。

句集には取り分け、月山と最上川の句が多く詠まれています。

出羽三山の最高峰である月山は修験道の聖地で、

や米を運び、上方から中央文化・海産物・雛人形等
を運び古くから栄え現在も観光地として人々を魅
してきます。

アカシアの花の膨らむ最上川

たまゆらの秋日を惜しむ最上川

去年今年出羽を貫く最上川

かはたれにかはほりの舞ふ最上川

春の川大きくなつて海に入る

蘆の芽のつんつん最上川の黙

掲句は母なる川の美しさと包容力を敬い、時にはやさしく、又時には怒りの面を見せる川と共に生活している人だけが知り得る小さな変化を見逃さず詠み、去年今年の句は共に平穏な暮しを願う思いが込められています。

妻のメモふところに入れ年の市

妻臥して梅雨の厨のがらんどう

梅雨晴や妻退院の日が決まる

夏至の日の妻の肌着を洗ひをり

伊藤啓泉句集『舟唄』鑑賞

老いを愉しむ

● 横尾麻衣

山頂には月山神社が祀られ、多くの参拝者が訪れています。私も一度だけでしたが高山植物を愛で、雪渓を眺めながら登頂しお参りさせていただきました。
啓泉さん始め地域の方々には父なる月山の懐に抱かれた生活の中で勇氣と希望を与えられたのではないのでしょうか。

月山の日を照り返す蕎麦の花

月山の裾まくりあげ山笑ふ

地虫出て月山の雲動かざり

秋天の全き月山霞みたる

月山の木立の幹に雪の貌

月山の風に真つ赤な木守柿

掲句は四季折り折り、朝な夕なに変る一瞬を捉え、自然写生の中に自らの感情の趣くまま詠まれています。

最上川もまた、山岳信仰と深く結びつき、山形の内陸盆地群を潤し、豊かな農村地帯を育みながら海に注いでいます。酒田港から北前船にて紅花

掲句は奥様が病いに倒れ、闘病生活を強いられた際、介護を引き受ける条件として俳句・短歌・郷土史の研究を継続することを許されたとの事。淋しさや安堵感・祈りが見事に詠まれています。慣れない家事は簡単に出来ることではありませんが、ご夫妻の長い歳月の信頼関係、互いに思いやる気持があればこそです。

老ゆるとは聞こえぬふりや梅の花

老ゆるとは忘るることよ春炬燵

笑ふほど悲しさのあり露の臺

掲句は日々の生活の中で己の老いを感じるようになって来る様子が詠われています。物忘れ・身体の衰えなど、これは誰にでも訪れる避けられない現実ですが、ユーモアのある言葉でさらりと受け流しています。これが長生きの秘訣ですよ。

昨年九月奥様が亡くなり淋しさがつのる毎日を過ごされている事と思いますが、俳句の仲間と共に笑いのある楽しい日々を続けて下さい。これからも啓泉さんらしい飾らない言葉で親しみのある佳句が出来ますように楽しみにしております。



「鶴沼・東屋は夢のおと」

鈴木 崇

小田急鶴沼海岸駅を下りて、商店街に出る。老舗の店舗が並ぶ小ぢんまりした商店街だが、マリネレジャーで有名な場所でもあり、サーファーが集まりそうなおしゃれな店も点在する。

海岸方面に少し歩くと、「旅館『東屋』の跡」の案内板が見えてくる。

東屋は明治後期から昭和初期にかけて、多くの文人が来遊した旅館である。この旅館と鶴沼海岸の歴史については高三啓輔著『鶴沼・東屋旅館物語』（博文館新社）に詳しい。著者が鶴沼開発時代の様子を聞くために古老を取材していると、決まって出てくる三つの言葉があったという。「あのころの鶴沼は、ちよいと歩くと、メカちゃん」と犬と病人にぶつかってね。

「メカちゃん」とは、お婆さんのこと、婦人がひとり住まいをすると、用心のため「犬」を飼う。三つ目の「病人」は、結核患者のことである。

別荘地や療養地として発展してきた当時の雰囲気的一端がうかがえる。

画家・岸田劉生は、転地療養のため大正六年（一九一七年）、鶴沼海岸に移住した。大正九年元旦から日記をつけ始め、劉生の最盛期であった鶴沼時代の記録となっている。『摘録劉生日記』（岩波文庫）は日記文学の必読書の一つ。大正十二年九月、日の記述は関東大震災の様子を詳細に記しており、貴重だ。

「今日という日は実に稀有の日である。おそらく安政以来の大地震ともいふべき大地震があつて、湘南、横浜東京を一もみにつぶしたのである。」

大正十五年四月、芥川龍之介は静養のため東屋に滞在し、以後翌年一月ごろまで鶴沼を生活の本拠とした。

きみだれや青柴つめる軒の下
陽炎や棟も落ちたる茅の屋根

芥川龍之介

それぞれ「鶴沼所見」「鶴沼」と前書のある句である。芥川は鶴沼時代の身辺に取材した短編『蜚氣楼』を残している。

「僕等は引地川の橋を渡り、東屋の土手



羽音集

増成栗人 選



の外を歩いて行った。松は皆いつか起こり出した風にくこうと梢を鳴らしていた。

引地川は、大和市から藤沢市を流れ、相模湾に注ぐ。河口付近は湘南海岸公園として整備され、公園は鶴沼海岸から片瀬海岸に沿って伸びる。

海岸はサーファーのグループでにぎわっている。

近所の住人なのか、白髪の精悍なおじさんがサーフボードを取り付けた自転車道に沿って走っていく。犬を連れた仲の良い夫婦ともすれ違う。

現在の鶴沼を歩いてぶつかるとは、「サーフボード、犬、明るい白髪」だ。



鶴沼・東屋跡

久方の酢飯の匂ひ秋の屋
トーストを三角に切る今朝の秋
仏蘭西の岩塩甘し秋に入る
水彩のむらさきが好き星月夜
水澄むや描き上がりたる裸婦の像
背丈越す唐黍畑の迷路かな
唐黍の皮を一気に引き裂けり
真直ぐに伸びて節ある木賊刈る
秋の夜やワクチン接種の微熱あり
栗ご飯米寿の義母の誕生会
草の花色えんぴつの十二色
人はみな恋をするもの天の川
来るもよし帰るもよけれ時草
ミディアムのステーキ好む生御魂
黙禱のとき蟬しぐれ蟬しぐれ
雁渡し喜寿の床屋の店終ひ
筑波嶺の全き空よ雁渡し
土用太郎浸水線ののこる家
健診の結果待つ間の蟬しぐれ
競技場のピクトグラムよ雲の峰

小樽 山田ゆきこ

伊勢崎 原 光生

流山 飯田 節

土浦 小林和子

楽庵閑話 ④

虫丸

